

藝大通信

GEIDAI TSUSHIN



23

SEPTEMBER 2011
TOKYO GEIDAI
東京藝大広報誌

塚原康子

受賞教員インタビュー

「第二回」研究室探訪
美術学部工芸科陶芸研究室

【第二回】卒業生に聞く。

山田和樹

【第六回】受賞学生インタビュー

大島碧 朴瑛実 田村友一郎

【第十五回】教員は語る

江口玲×長嶋寛幸

【第四回】上野の寄り道散歩道「上野動物園散策」

塚原康子

受賞教員インタビュー 第4回

雅楽の近代化の過程を解き明かした『明治国家と雅楽』が田邊尚雄賞を受賞。
今年度からは本学音楽学部附属音楽高等学校校長の重責も担う。

明治初年の雅楽改革

日本音楽史を研究してきたなかで『明治国家と雅楽——伝統の近代化／国楽の創成』は、何年もかけて構想を練り執筆した本です。少し難しそうなタイトルですが、みなさんご存じの雅楽という音楽が、明治維新後の大きな変革を経て、いまのような形になったことを伝えることが、この本を書いた目的のひとつです。

雅楽というと「宮廷音楽」「神道の音楽」のイメージが強いかもしれませんが、もともとは仏教ともゆかりの深い音楽でした。また江戸時代には、宮廷だけでなく幕府や諸藩でも雅楽の楽人を抱えていたのです。

それが明治以降、宮廷や神道のための音楽として使われる度合が高くなったため、古くからそうであったかのように思われてい



『明治国家と雅楽 伝統の近代化 / 国楽の創成』(有志会)

るかもしれません。変化の発端となった雅楽の改革は、早くも明治初年から始まりました。明治政府にとつては、雅楽の伝統を近代化し、いち早く制度化する必要や緊急性がそれだけ高かったわけです。

またそれとともに、宮廷に仕えていた雅楽の演奏者たちは、それまでの楽人から明治政府の伶人(のちの楽師)となり、雅楽の「万芸」を兼ねたうえ、西洋音楽を習

得することも命じられました。そして「保育唱歌」という、雅楽の音階を使った近代歌謡をつくる役割を担うことにもなりました。

邦楽の一分野である雅楽が経験した「近代化」を検証することで、明治以降の日本音楽史の違った一面をうかがい知ることができるようです。

今回の本で賞をいただいた「田邊尚雄賞」は、社団法人東洋音楽学会の初代会長で音楽学者であ

第23号 目次

02 受賞教員インタビュー 第4回
塚原康子

04 geidai gallery vol.3

山下了是 山と瀧の図

06 教員は語る 第15回

江口玲×長瀧寛幸

09 受賞学生インタビュー 第6回

大島碧 朴瑛実 田村友一郎

12 TOPICS

美旬 音旬 映旬

20 卒業生に聞く。 第2回

山田和樹

22 研究室探訪 第2回

美術学部工芸科 陶芸研究室

24 上野の寄り道 散歩道 第4回

上野動物園散策

26 上野の杜の波瀾万丈 第12回

日本美術の保護 前篇

吉田千鶴子

28 展覧会&演奏会情報

彫刻の時間——継承と展開——
藝大アート・スペシャル2011

30 NEWS 2011.02 ~ 2011.07

編集後記

る田邊尚雄先生(一八八五—一九八四)の功績を偲んで、東洋音楽に
関する研究業績に対して贈られ
る三十年近い歴史をもつ賞です。
『明治国家と雅楽』はこれまで長
く取り組んできた成果ですので、
受賞を一区切りにこれからも研究
に励みたいと思います。

藝高校長として

ところで今年度から私は、粕谷
(多)美智子先生の後任として、



Photo by Hiroaki Horiguchi

本学音楽学部附属音楽高等学
校(以下「藝高」)の校長の重責を
担うことになりました。藝高とい
うと、ピアノやヴァイオリンなどの
専攻のイメージが強いかもしれま
せんが、一九九九年(平成十一
年)より邦楽の専攻も設置され、
箏曲を始めに、現在は尺八、長
唄三味線、邦楽囃子の専攻があ
ります。

月には、卒業試験にあたる三年生
の公開実技試験全てに立ち会い
ました。高いレベルの技量をもつ
とはいえ、まだ十七、八歳の高校
生が、一人で公開試験にのぞみ全
力で演奏する姿は、まるで「勇者
たち」とでも呼びたいくらい、ほん
とうに印象深いものでした。今後
も、この生徒たちの行く末を見
守っていこうと心に思う一方、校
長としての責任の重さをひしひ
しと感じました。

藝大通信
No.23
TOKYO GEIDAI
東京藝術大学広報誌
藝大通信 第23号

■編集発行

東京藝術大学藝大通信編集部

■編集委員

松下計(美術学部デザイン科准教授・編集長)

斎藤典彦(美術学部絵画科日本画准教授)

小鍛冶邦隆(音楽学部作曲科教授)

毛利嘉孝(音楽学部音楽環境創造科准教授)

筒井武文(大学院映像研究科映画専攻教授)

大石泰(演奏芸術センター准教授)

アートディレクター

松下計

■表紙デザイン

松下計

■表紙撮影

堀口宏明

■撮影

堀口宏明、川島保彦

永井文仁(美術学部附属写真センター)

■制作

株式会社平凡社

■発行日

平成二十三年九月二日

■お問い合わせ先

東京藝術大学総務課

〒一〇一八七四 東京都台東区上野公園十二-八

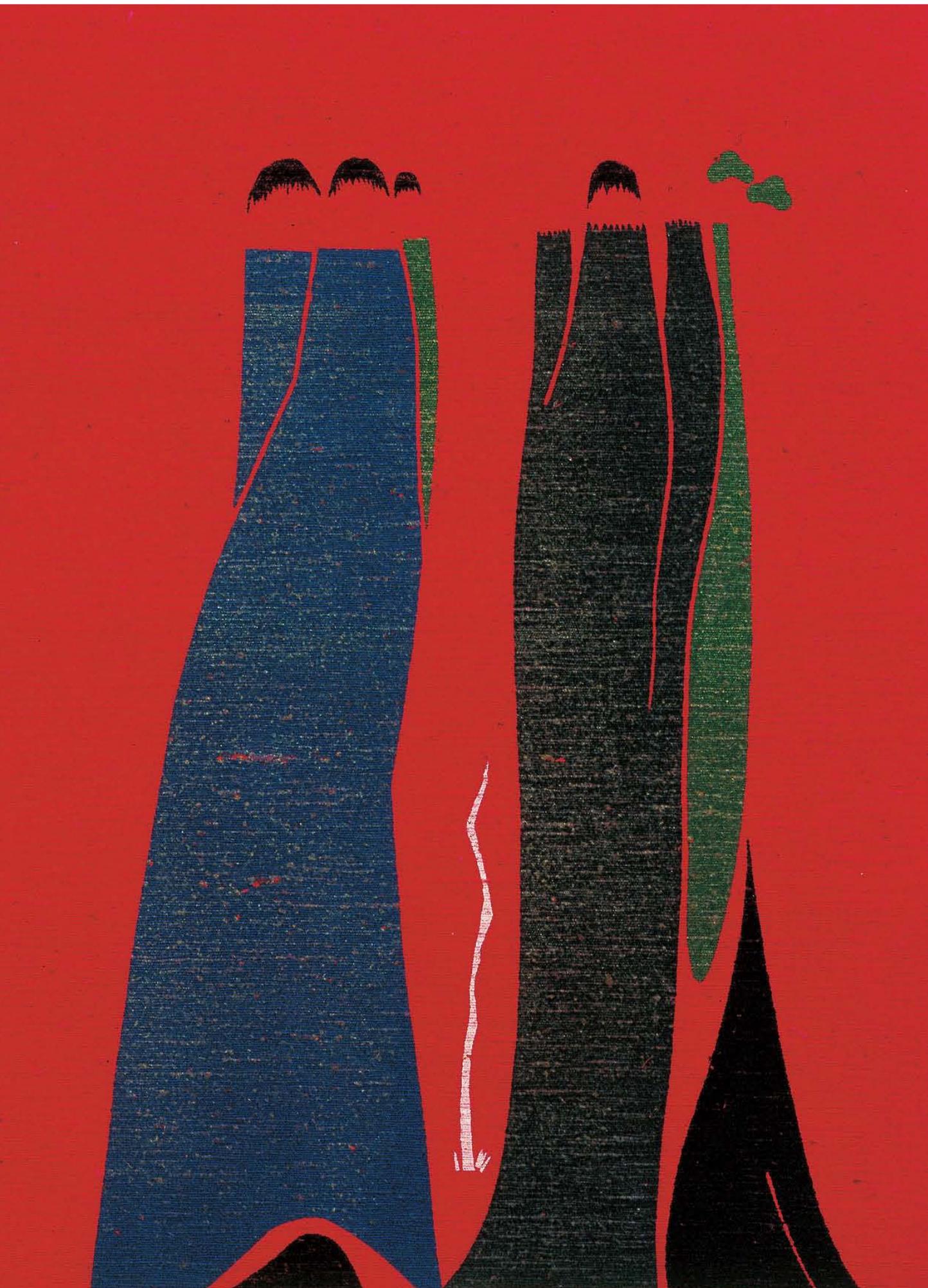
電話 〇五〇一五五二一〇二六

FAX 〇三一五六八五七七六〇

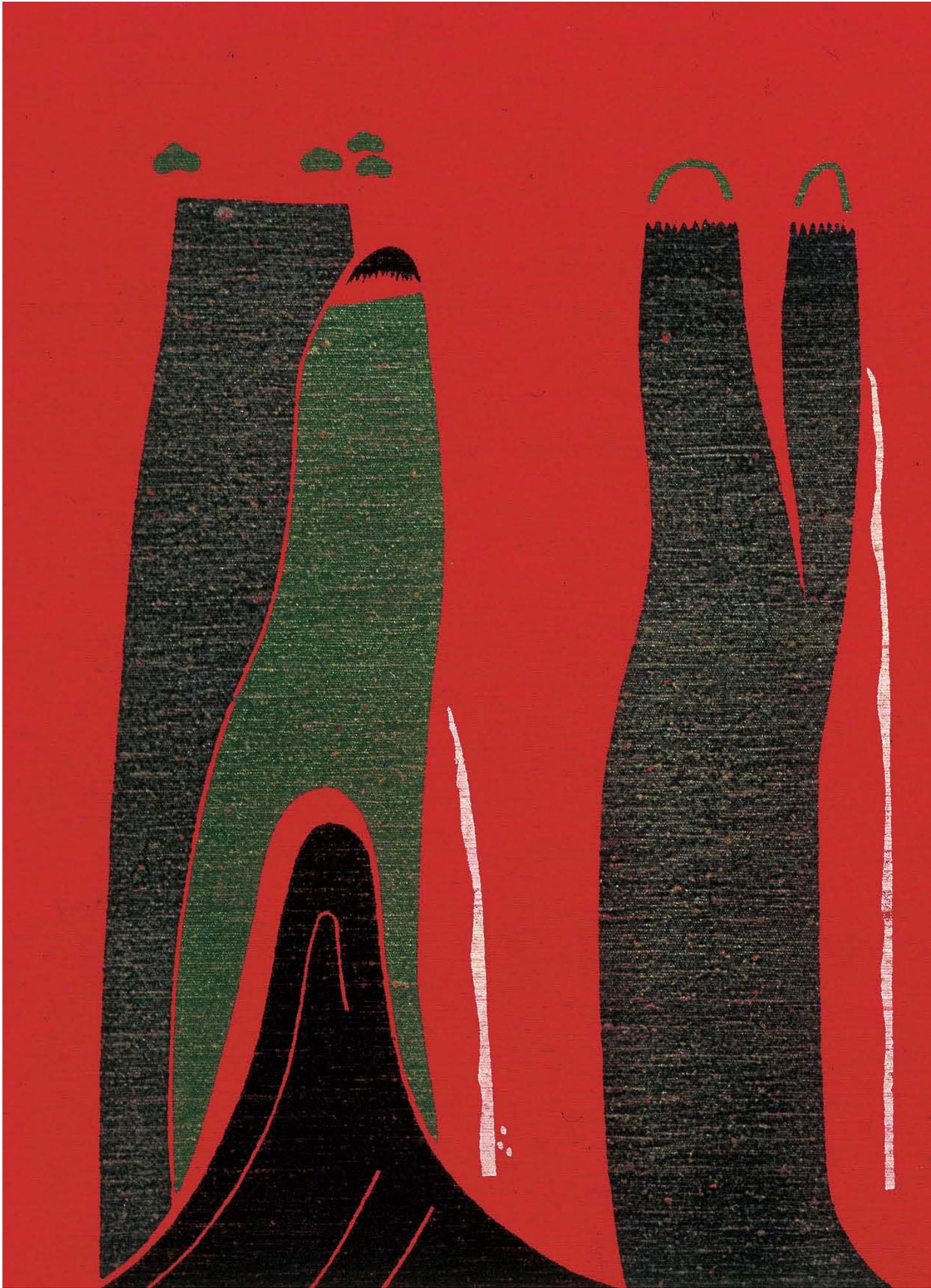
E-mail tolawase@ml.geidai.ac.jp

URL <http://www.geidai.ac.jp/>

塚原康子(つかはら・やすこ)教授 音楽学部楽理科
一九五七年北海道生まれ。八二年東京藝術大学音楽学
部楽理科卒業。九〇年東京藝術大学大学院音楽研究
科博士後期課程修了(学術博士)。九二〜九四年東京
藝術大学音楽学部楽理科助手。二〇〇二年同助教授
(〇七年四月より准教授)を経て〇九年より同教授。二〇
二年より東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校校
長。著書に、『十九世紀の日本における西洋音楽の受
容』(京都音楽賞・田邊尚雄賞受賞)、『はじめての音
楽史』(共著)、『ブラスバンドの社会史』(共著)ほか。二
〇〇九年、『明治国家と雅楽—伝統の近代化/国楽
の創成—』(有志舎)で第二十七回田邊尚雄賞受賞。



工芸科(染織)―教授 山下了是『山と瀧の図』



少年時代の音楽環境

長 島 私は、音楽学校ではない関西の私立大学を卒業したので、これまでアカデミックな音楽教育は一切受けずに現在にいたっています。

私の音楽的体験をお話すると、十歳の時に小さなシンセサイザーを手にして、そこから自分なりにシンセサイザーとテープレコーダーを使った音響実験のようなことを始めるようになりました。シュトックハウゼンをはじめとする現代音楽は小さなころから聞いていたのですが、周囲に音楽の趣味が合う人がいなかったで(当然と言えば当然ですが)、一人で黙々とやっていただけです。やってきたことは、実は今の私がやっていることとほとんど変わりません。素材を録音し、それを加工しながら「作品」に変えていくようなプロセスです。

江 口 私は、藝大の音楽学部附属音楽高等学校(以下、「藝高」)の出身ですが、入学前は関西のいわゆる大都市ではないところで育ちました。しかし、その環境で育ったことで得られたものが大きかった、と実は今はそう思っています。得られる情報が固定化している環境で最高のものを与えられたのではなく、雑草のように、身近のさまざまな情報を自身に取り入れながら育ってきたことが、今の自分の音楽面での基礎を形づくっているのではないかと思うのです。

藝高に入学して初めてわかったことなのですが、同級生はみな、小さな頃から藝高に入る準備をしてきた人ばかり。私は東京の先生はだれも知らないという状態でしたので、そのときにはかなりのショックを受けたことを覚えています。

長 島 私の仕事は映画を中心とした映像作品に付加する音楽を作ることがメインなのですが、作品によっては、整音作業という台詞と効果音、

それに音楽をミックスする仕事もしますし、作品によっては効果音だけを作るといった場合もあります。ですから、「あなたの職業は何ですか?」と尋ねられると、実は返答がなかなか難しかったりもします(笑)

高校生の時に、映画監督の石井聰互さんにデモテープを送って「おもしろいところがあるから」という返答をいただいて商業作品を担当したのが、今にいたるきっかけです。私自身は「音楽」というよりも「音響」のようなどころからスタートし、それをどう「作品」にするかという姿勢でやってきました。最も影響を受けた音楽にブライアン・イーノが提唱した「アンビエント・ミュージック」があります。しかし、私が仕事を始めた当時は「アンビエント」と言っても、映画業界では誰にも通じませんでした。音楽を作ったっていくと「メロディがはつきりしなくて効果音のようだ」と言われ、効果音を持つていくと「メロディが聞こえて音楽のようだ」と言われ、という感じでした。今では「アンビエント・ミュージック」というジャンルはごくごく一般的なものになったわけですから、この二十数年で「リスナーの耳」(「音」についての意識)がかなり変わったという感じがします。

江 口 私のアメリカ留学当時は、クラシックの拠点はフランスやドイツを中心としたヨーロッパでした。ですから、留学を決めた際は「どうしてアメリカなんかに行くんだ」と言われていました。しかし、実際にアメリカに行くと、ヨーロッパからの留学生がとてたくさんいて、彼らに言わせると、ニューヨークにはヨーロッパの最高の音楽が集まっているから、勉強する意義はたくさんある、とのことでした。当時はまだ共産圏が崩壊する直前でしたから、ソビエトやルーマニア、ユーゴスラビアという国からの留学生がたくさんいて、彼らは「一度アメリカ

第15回

教員は語る

音楽学部器楽科(ピアノ)准教授

江口 玲



演奏中の江口玲氏

長 寛 幸

大学院映像研究科映画専攻 准教授

藝大への期待・抱負・提言



『サッド ヴァケーション』、『エリ・エリ・レマ・サバクタニ』、『恐怖』のDVD

に來た以上、西側の国で成功する」と必死でした。その意志の強さはほんとうにすごかった。彼らと比較すると、日本人留学生は、ほんわかとしていましたから、そういう世界があることを見ることができたのは、私にとってはとても大きな経験でした。

デジタル化がもたらすこと

長 寛 映画の世界も大きく様変わりして、今年「デジタル元年」といえる年だと思っています。今までの映画は35ミリのフィルムにプリントすることがスタンダードでしたが、最近「DLP上映」というプロジェクトで上映する上映形態のシェアが増えてきています。映像も音声もフィルムに焼き付けられるのではなく、データになるわけです。一説には、「おそらくあと五年でフィルムはほとんど使われなくなり、その後にはフィルムで撮れるのは、よほどお金が潤沢な場合かマニアックな作品だけになる」といわれています。「五年」という数字が正しいかどうかわかりませんが、今後、映画が「アナログからデジタルへ移行する」ことはまちがいはありません。

映像研究科でも今年からDLP上映機を導入し、上映用のデータも学内で作成できるようになりました。

江 口 それは、映画館でのクオリティと同じものを、大学の施設のなかで全部作ってしまうということですか？

長 寛 そうです。「デジタル化」ということについてもう少しお話ししますと、映画の上映形態がアナログからデジタルへ移行することで、まづ何よりも上映の費用が変わってきます。今まで全国で一斉公開をしようとすると、その本数分のプリントを作る必要があったのですが、デ

ジタルになれば公開館分のデータをコピーするだけですみます。単純な話のようですが、これが映画業界に与える影響は計り知れない、と私は考えています。作り手からみると、納品の最終形態がデータですので、フィルムと比べ、劇場で「作ったままの状態」を再現できる可能性が飛躍的に高まるのではないかと思っています。

江 口 クラシック音楽の分野では、そのような技術はともアナログなものです。たとえば、人が作った音楽をそのままの状態で保存することを目的としてデジタルメディアを使う場合でもあっても、演奏しているのはもちろん人間ですから、その時点ですでにデジタル的な完璧さはないわけです。現在の録音編集技術であれば、CDを作るときに、一音だけ音を直すことも可能です。ただ、果たしてそれが、私たちの芸術にとってどのような意味をもつかという葛藤はあります。

見つけ出すプロセスが大事

江 口 長 寛先生は、この三十年近くの技術の進歩を、ずっと間近に見てこられた。ところが学生の場合、数年の間に歴史を全部飛び越えて、新しい技術を手に入れるわけです。その辺のギャップを、感じられることはありませんか。

長 寛 逆に私は学生に「やらなくてもいい苦労はしなくていいよ」と言っています。「(ハード、ソフト問わず)新しい機材を使って時間の短縮ができるのなら、それにこしたことはない。問題は(以前から比べると)あまった時間で何を考え、何をやるかが大事だ」と毎日のように言っています。「技術を知り、習得することはもちろん必要だけでも、その技術を使いこなすための『思想』がないと簡単に技術に人間が使われてしまうよ」とも。

江口 自身が試行錯誤して積み重ねてきた知識を学生に与えることは簡単なことですが、実はそれらを見つげ出すまでのプロセスが大事で、できることなら彼らにもそういうプロセスを踏んでほしい、と私は考えています。もちろんヒントは出しますが、そこから先は自身で試行錯誤してほしいのです。いろいろと試した結果失敗しながら身につけたことと、何も試さずに教わって覚えたことには、明確な質の違いがありますから。

できることならば、藝大の学生たちが音楽の世界で生きていくことができるようにしたいのですが、ビジネスという点でみると、供給に需要が追いついていませんから、非常に厳しい状況です。

長島 ビジネスという点から見ても、映画の世界においてアメリカで成功することも正直、大変ですね。「呪怨」という映画を全米で公開した一瀬隆重プロデューサーとも「恐怖」という作品と一緒に仕事をしましたが、話を聞いていると、あらゆる面で日本と違います。端的にいえば予算ですが、それに付帯してスタッフの人数が桁違いです。たとえば、ハリウッドでは大作の効果音スタッフは完全分業制で、映画一本当たり一〇〇人を下らないと聞きました。日本では、同じクオリティーを出すための予算も人材も圧倒的に不足していますし、日本映画が世界配給を前提にした大規模な予算の作品制作を恒常的に行っていくかという限り、この溝を埋めるのは非常に困難だと思います。欧米と勝負をするのであれば、アメリカではなくヨーロッパに向けた（エンターテインメント作品ではなく）アート作品で立ち向かうべきだと私は考えています。

変化した身体感覚

江口 長島先生が音楽をおつくりになった「へんげ」を観たのですが、あの音源はすべてコンピュータですか。

長島 そうです。

江口 コンピュータとは全くわからないですね。ほんとうにびつくりしました。

長島 いえいえ、そんなことはないです（笑）ここ数年で音源自体がよくなってきていますから。ハリウッドでは「モックアップ」というコンピュータ用の音源を使ったデモ曲（完成形は、もちろん生のオーケストラになりますが）をプロデューサーに聞かせて承諾をとるという作業がものすごく重要で、曲自体のクオリティーもさることながら、音質や「いかに生のオーケストラに近いか」ということも評価の基準になっているようです。パーソナル・コンピュータの処理能力がこの数年で飛躍的に上がったことも呼応していると思います。

ただし、あくまでも「生」ではないので、そこを履き違えないようにしないとイケないと思っています。生演奏には圧倒的な素晴らしさがあるし、何よりも人間がその場で演奏しているというダイナミズムは動かしようのない事実で、それが感動の源の一つでもあるのですから。

江口 クラシック音楽という生の音を出す立場の私としては、その時代によってある程度の音の流れがあるような気がしています。というのも、もちろん録音技術の進歩もあるのですが、八十年代からの録音は音が完璧なのです。学生たちはそれを聞いて、「こう弾かなければいけない」とその完璧さを目指してしまいうきらいがあります。「そもそもなんのために楽器を演奏しているのか」に発想を戻さないとイケないのです。私自身の理想の音楽がかなり古めかしいものなのですが、学生たちにその音源を聴かせてみると、彼らの感想は「僕はああいうざら

ざらした音は苦手です」です（笑）内容を聴かず、音だけを聴いている。聴き方自体がそうなっ

てしまっているのです。ですから、体の動きと出てくる音が意外と結びついていない学生がたくさんいます。たとえば、ものすごく深い悲しみをもって弾かなければいけないところなのに、そうならない。私に「音を消して映像だけを見ていたら、楽しい曲を弾いているように見えるよ」と言われるまで気がつかない。それはもしかしたら今の若者特有のものかもしれません。

長島 すごく象徴的な話だと思います。先ほどの「ざらざらした音」というのも、リスナーの感覚です。今のお話を聞いていると、若者の身体感覚が変わってきている感じがします。

ところできょうはぜひお伺いしたかったのですが、ウラジミール・ホロヴィッツのピアノを弾かれたそうですが、その際どのような印象でしたか。

江口 私は現実的に物事を見るタイプなのですが、あのピアノを実際に触ってみたところ、もしかして霊はいるのかなと思ってしまうような感覚がありました。さまざまな物理的な条件が偶然重なって完成したのでしようが、あれほど個性のある楽器は、今の時代、なかなか見つかりません。

長島 やはり。ものすこかったですか。

江口 最初に触ったときの印象が、これは今まで私が知っているピアノという楽器ではない。これは今まで私が弾いていた感覚で弾くと全く寄せつけてもらえない、というものでした。「おまえなんかにおれは弾かせないよ」というピアノの意思のようなものを感じました。私がかんとかしようと思っても全くいうことを聞かず、何時間か格闘した後、この楽器を弾くのは無理だと思いはじめました。

そこで一考し、ピアノストとしては正しいアプローチの仕方ではないのですが、ホロヴィッツが得意とした曲を、ホロヴィッツを真似て弾いてみたのです。ホロヴィッツはこういう音で弾いていたはず、という感じで。すると、その瞬間に別のピアノに生まれ変わりました。こちらへ近づいてきたというか、やっと許してくれたというか。なるほど、この楽器はこういう音を出すために、こういう弾き方で弾いてもらうためにあるとわかりました。それに逆らっても絶対にだめなのです（笑）

ホロヴィッツが若いころは、ロシアの音楽家がアメリカで演奏するためには、何週間もかけて船で海を渡らなければなりません。そういうプロセスがあった時代には、やはり演奏のクオリティーや演奏に対する意識が現代とは異なり、精神的になにかとても大事なものをもっていた気がします。

江口 玲（めぐち・あきこ）

音楽学部楽科（ピアノ）准教授

一九六三年東京都生まれ。東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て東京藝術大学音楽学部作曲科を卒業。その後同校にて講師を務めた後、ジュリアード音楽院のピアノ科大学院修士課程、及びプロフェッショナルスタディーを修了。二〇一一年五月までニューヨーク市立大学ブルックリン校にて教鞭を執る。〇六年より洗足学園音楽大学大学院の客員教授を務める。二〇一二年より現職。

長島寛幸（ながしま・ひろゆき）

大学院映像研究科映画専攻 准教授

一九六六年京都府生まれ。八九年関西学院大学社会学部卒業。大学在学中に石井聰互監督の映画音響ライブ・リミックスを行ったことがきっかけで、メディアを問わず多数の作品の音楽、音響を手掛けるようになる。主な映画作品には「エンジェル・ダスト」「メモリーズ エピソード3 大砲の街」「レイクサイドマーダーケース」「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」「サッドヴァケイション」「ありがとう」接吻「大と歩けば、チロリとタムラ」「恐怖」などがある。また、電子音楽グループ「Downson」としての活動もおこなっている。二〇一二年より現職。

藝大の在校生・卒業生は、
公募展やコンクールで栄誉ある賞を受賞し、
また各分野の最前線で活躍している。
若き才能がふだんの努力とさらなる意欲を語る。

2010年度五大学卒業設計合同公開講評会グランプリ

大島 碧

◆大学院美術研究科修士課程建築専攻1年

藝大では学部3年からトム・ヘネガン教授の指導を受けています。イギリス出身のヘネガン先生は、まさに英国紳士というように器が大きな方で、お父さんのように慕わせていただいています。自由で明るい研究室の雰囲気もすばらしいです。

藝大の建築科は、工学系ではない美術系の建築科であることが大きな特色です。私自身、美術として、意匠としての建築に興味を抱いて藝大を受験しました。子供のころから美術の専門教育を受けてきたわけではなかったので大きなチャレンジでしたが、今は藝大に進んでよかったと思っています。

私が建築に魅力を感じる理由のひとつとして、設計者と施主の間に、ほかの芸術領域にはない濃密な関係性が求められるという点があります。こういう社会的な役割は、用途による違いはあるものの、建築のとても重要な問題をはらんでいると思います。実際の施工を伴わない大学の課題

でも、こういう建築の役割を考えながら設計に取り組んでいくつもりです。

今回私がグランプリをいただいたのは、2010年度五大学卒業設計合同公開講評会です。この公開講評会は今回が5回目です。これまでは国内の3大学、東京藝術大学と東京大学、東京工業大学の卒業設計を対象にしてきましたが、今回から、中国の精華大学と韓国のソウル大学が招待され、日本の卒業設計講評会としては初の試みとなったそうです。

私の卒業設計は「図書を巡る庭」といい、有栖川宮記念公園の園内に建つ東京都立中央図書館を解体し、再構築するというものでした。有栖川宮記念公園は東京麻布という都心にありながら、豊かな自然と起伏のある立地を生かして、日本の伝統的な回遊式庭園を展開しています。モダンな外観の図書館は公園を登りきった平地に建っているのですが、庭園と景観的な結びつきがあまり感じられな

いことを長い間残念に思っていました。そこで、図書館が庭園を回遊しながら一体化するように、一連の帯状の空間が園内を巡るような設計を考えたのです。

建築は周囲の環境や景観と切り離せないものです。しかし、周囲とは無関係にデザインされた建物も少なくありません。私は一棟の建物を設計するというより、個別の土地と深くかかわりあい、強く結びつくような空間を考えていきたいと思っています。

もともと私は街を歩くのが好きで、東京でも長い距離を歩いて移動することがあります。東京を歩いていると、街と街が地続きでも、別の街に足を踏み入れ、境界を越えたとわかる明らかな印象の変化があります。計画的につくられ、区画化された欧米の大都市とは違い、ゆるやかな「景」の連なりが都市を形づくっている。東京は連作で綴られた短篇小説に似ているのかもしれない。



卒業設計作品「図書を巡る庭」。左：全体イメージ 右：窓・内観

おおしま・みどり

1987年東京都生まれ。東京藝術大学美術学部建築科卒業。2010年度JIA卒業設計コンクール東京大会審査員特別賞受賞。建築科の卒業設計作品「図書を巡る庭」で2010年度「五大学卒業設計合同公開講評会」グランプリを受賞。



第79回日本音楽コンクール（2010年10月）
声楽部門本選での歌唱 ©毎日新聞社提供

ぼく・てるみ

1977年千葉県生まれ。東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。同大学院音楽研究科修士課程声楽専攻修了。学部在学時、安宅賞受賞。藝大バッハカンタータクラブに所属し、小林道夫氏の薫陶を受ける。声楽を佐々木正利、朝倉蒼生、佐竹由美、佐々木典子の各氏に師事。2004年、第15回友愛ドイツ歌曲（リート）コンクール第2位。2006年、第14回日仏声楽コンクール第1位ならびに日本歌曲賞受賞。2007年、JT主催「期待の音大生によるアフタヌーンコンサート」に出演。2008年、第77回日本音楽コンクール入選。2010年第79回日本音楽コンクール声楽部門（歌曲）第1位入賞、併せて岩谷賞（聴衆賞）、木下賞受賞。



第79回日本音楽コンクール声楽部門（歌曲）第1位

朴 瑛 実

◆大学院音楽研究科博士後期課程音楽専攻（声楽）3年

私が本格的に声楽に取り組みはじめたのは、今から10年前、藝大受験を決めた頃からです。音楽そのものを始めた時期は5歳の頃で、中学3年生までピアノを続けた後、高校時代には合唱部に所属しました。藝大入学前に一般の私立大学でドイツ文学を学んでいたのですが、合唱がとても好きであったため、そこでも50年以上の歴史をもつ合唱サークルに入り活動していました。そのサークルはルネサンス時代やバロック時代の教会音楽を扱うことが大きな特色で、そこでの活動はとても面白く充実していたため、合唱を通じて自然とソロ演奏に対する意欲も湧いてきました。

藝大音楽学部は、周りが優秀な人ばかりという環境なので、ほんとうに日々大きな刺激を受けています。藝大では佐々木典子先生の指導を受けており、第一線で活躍している音楽家ならではの知性や音楽に向き合う真摯な姿勢など、目標とするのが憚られるくらい素晴らしい先生です。

日本音楽コンクールの声楽部門は、1

年おきに、「歌曲」と「オペラ・アリア」の審査がおこなわれます。第1予選、第2予選と進み、本選では15分以内に2か国語以上（うち1曲は日本語）の歌曲を歌うことが義務づけられています。私は2008年度（第77回）にも挑戦したのですが、そのときは本選に残ったものの、入選止まりでした。

今回、本選では高田三郎の「くちなし（《ひとりの対話》から）」と、フランツ・リストが作曲したドイツリートを4曲、「私の歌には毒がある」「祝福あれ、あの日に（《ペトラルカの三つのソネット》から第2曲）」「それは素晴らしいことに違いない」「すべての頂に憩いがある」を歌いました。自身も名だたるピアニストだったリストは、超絶的な技巧を要するピアノ曲で有名ですが、90曲におよぶ魅力的な歌曲も作曲しています。そして今年（2011年）がリストの生誕200年にあたることから、それにちなんでプログラムを組んだという面もあります。

不本意なことなのですが、本選の当日、風邪をこじらせ体調が最悪でした。最後

まで歌いきれば悔いはないという気持ちで審査に臨んだので、第1位を受賞したのがほんとうに信じられませんでした。また、「日本歌曲がよかった」「プログラムの選曲がよかった」という評判を聞き、意外で驚きましたが、とてもうれしい感想でした。

今年は3月から受賞者発表演奏会で全国をまわりました。3月11日に起きた東日本大震災のため、一部の公演が中止になったのですが、さまざまなプログラムに取り組んだつもりです。今回の受賞を励みに、これからは歌曲の演奏力を今以上に高めるとともに、これまで取り組まなかったオペラなどの分野にも積極的に幅を広げていきたいと考えています。2年前に藝大演奏堂でおこなわれた「コンサート・オペラ」において、ヘンデルの後期オペラの傑作《アリオダンテ》で重要な役をいただいたことがあります。もともと古楽をきっかけに声楽の世界に飛び込んだものですから、この方面も極めていきたいと思っています。

田村友一郎

◆大学院映像研究科博士後期課程映像メディア学専攻2年

日本大学芸術学部写真学科を卒業したあと、約4年間出版社でカメラマンとして働いていました。大学時代は、ジェフ・ウォールやベッヒャー以降のトーマス・シュトルート、トーマス・ルフなどのドイツ写真の潮流に惹かれましたが、「内面性」を求める日本の写真界には馴染めず、写真にはあまり興味をもてずにいました。ですから、卒業後は積極的にいわゆる作品というものを制作していなかったように思います。

そのような中、自分が仕事をしていた雑誌で佐藤雅彦先生の「考えの整とん」という連載が始まり、肩書に「東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻教授」と記されているのを見つけたのです。この連載では、日常を生きるなかで新しい法則を見つける、あるいはものの見方を変えることによって新しい発見がある、ということが書かれており、とても刺激になりました。そこで、こういう領域に興味を持ち藝大の映像研究科を受験しました。

藝大入学後、最初はグループ作業がほとんどで、個の表現よりもパブリックな表現をめざすことを徹底的に叩き込まれたよ

うに思います。メディアリテラシーとはどういうことかということです。このことは、いまのぼくの制作活動に大きく影響を与えていると思います。

ぼくの場合、メディアアートや映像と呼ばれる領域で作品制作に取り組みながらも、常に写真をよりどころにしているという意識があります。映像の歴史をたどると、絵画、写真、映画という流れで発展してきたように見えますが、写真というメディアが映像という分野の生まれる大きなきっかけとなっています。しかし、それにもかかわらず、写真が映像に対して果たす役割や意味は、未だに大きな謎に包まれているのではないかと考えています。さらに、ぼくは、自己表現としての写真よりも「自分が撮らない写真」や「撮影者の存在を消した写真」に興味がありました。文化庁メディア芸術祭アート部門で優秀賞を受賞した「NIGHTLESS」も、そういう関心から生まれた作品です。

「NIGHTLESS」は、Google マップのストリートビュー画像を組み合わせて構成した、一種のロードムービーです。インターネット

の世界に存在する世界各地の風景を、1枚ずつスクリーンショットで保存し、映像編集ソフトでつなぎ合わせた「机上の旅」。ぼくはどこへも出かけず、撮影も一切していません。ストリートビューがおもしろいのは、単なる記録であり、芸術性のかげりもない画像だからです。しかも、ストリートビューの中には偶然に写真に撮られてしまった人々が写し込まれたりもしています。ですから、そこに制作者であるぼくの意味は存在していないといってもよいかもしれません。

また、「NIGHTLESS」には、映画のように会場や劇場に座って観賞するのではなく、スクリーンの前に自動車を置き、運転席や助手席から観るという、インスタレーションというべき鑑賞法もあります。フロントガラス越しに観た風景は、ドライブ・イン・シアターで映画を観るという行為を想起するかもしれません。また、今後はストリートビューに限らず、タイトルにある「夜が訪れない」という概念をより突き詰めていこうと思っています。ですから、それは、必ずしも今までの映画という形をとらないものになるかもしれません。



たむら・ゆういちろう

1977年富山県生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒業。東京藝術大学大学院映像研究科修士課程メディア映像専攻修了。2006年写真作品《IN PORTRAITS》にて「Esquire Digital Photograph Awards 2006」審査員特別賞受賞。主な参加展示に「Pèlerinage + prière」(Gallery LU/フランス、ナント)、「佐藤雅彦ディレクション“これも自分と認めざるをえない”展」(21_21 DESIGN SIGHT/東京、2010年)、2010年度、映像作品「NIGHTLESS」にて第14回「文化庁メディア芸術祭 アート部門」優秀賞受賞。第57回オーバーハウゼン国際短編映画祭、第3回恵比寿映像祭、広島市現代美術館などで上映。



上：「NIGHTLESS」の1シーン。

下：藝大横浜校地における修了展示でのインスタレーション



「ゆらぎツリー」2010年度設置作品(墨田区)



「GTS Bench」2010年度設置作品

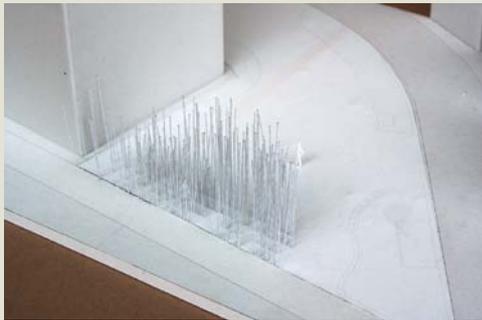
TOPICS OF
FINE ARTST

2011.02 - 07

美旬



「イメージマケット1」2011年度設置作品



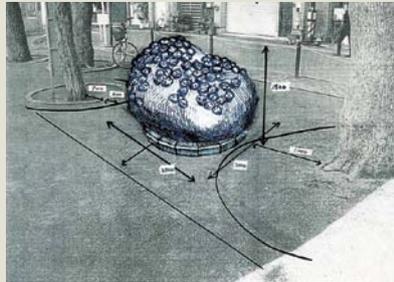
「イメージマケット2」2011年度設置作品



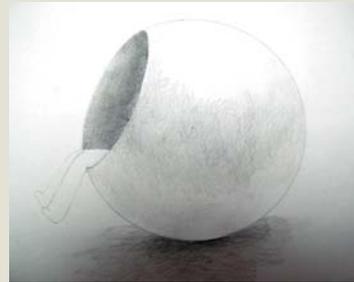
「LOOK」2010年度設置作品(台東区)



「イメージドローイング3」
2011年度設置作品



「イメージドローイング2」
2011年度設置作品



「イメージドローイング1」
2011年度設置作品

1

GTS(藝大・台東・墨田)観光 アートプロジェクト2011

昨年度に引き続き、本学と台東区、墨田区の三者の共催による地域連携事業『GTS 観光アートプロジェクト2011』が実施される。

このプロジェクトは、平成二十四年度から二十四年度までの三年間の計画で、東京スカイツリーのビューポイントに環境アート作品やアートベンチなどを設置する「アート環境プロジェクト2011」と、地域での現代芸術展、映像展や音楽コンサートの複合的な展開をおこなう「隅田川 Art Bridge 2011」の二つの事業を軸に構成され、東京スカイツリーと浅草を結ぶ隅田川両岸地域に展覧会場を点在させ、「記憶・場・歴史・コミュニケーション」のテーマに沿った企画展やイベントを開催する。

実施に先駆け、七月十六日から二十九日には今年度新たに設置される環境アート作品四点とアートベンチ・サインの制作過程を区民に公開する「マケット・プランニング展(前期)」、また、七月二十三日には小中学生を対象にした区民参加ワークショップ「東京スカイツリーを描く、東京スカイツリースポットを探せ!」が前述の地域を舞台に実施された。



保存修復彫刻研究室 研究報告発表展
産経学園・銀座おとな塾における展示風景

2

保存修復彫刻研究室 研究報告発表展

2

四月二十日から二十四日までの間、産経学園・銀座おとな塾において、本学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復彫刻研究室が研究報告発表展を開催した。

本展では、保存修復彫刻研究室において、平成二十二年度に教員及び学生が修復した仏像などの彫刻文化財や模刻作品を展示し、さらに、彫刻に限らず、日本画や工芸分野の模写・模造作品の展示、油画・建造物・保存科学分野の研究発表なども併せておこなった。また、会期中には、実際の修復や研究の担当者によるわかりやすい研究報告トークもおこない、普段見ることのない文化財修復現場の裏側をのぞくことができた。

保存修復彫刻研究室 HP

<http://www.tokyogeidai-hozon.com>

3

アジア総合芸術センター 美術学部交流事業 「伝統と現代」展

五月十二日から六月十九日までの間、本学大学院美術館陳列館で、アジア総合芸術センター美術学部交流事業「伝統と現代」展を開催した。

本展は二部構成で、第一部は中国中央美術学院潘公凱院長による墨と映像の芸術表現、第二部は本学と中国中央美術学院の若手教員などが参加し、内在する伝統を現代表現として作品化したドローイング作品約五十点による「伝統・現代・発生」ドローイング展であった。開催に



アジア総合芸術センター美術学部交流事業「伝統と現代」展
右：大学美術館陳列館における展示風景 左：潘院長による作品の公開制作風景

3



「saif PROJECT」—台東区地場産業の芸術による活性化の研究発表展—

右上：「隠喩/metaphor」 右下：「装飾/décor」 左上：「素材/material」 左下：「空間/space」

4

4

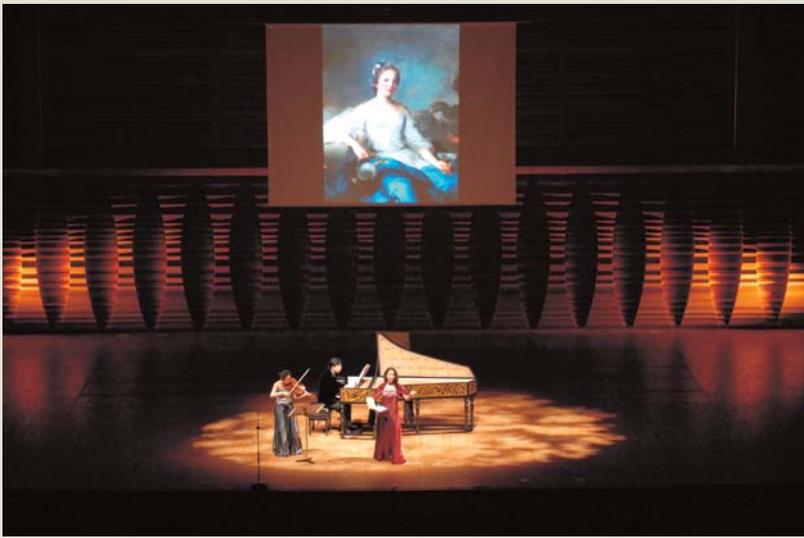
「saif PROJECT」 —台東区地場産業の芸術による 活性化の研究発表展—

三月三十日から四月十七日までの間、本学藝大アートプラザにて「saif PROJECT」—台東区地場産業の芸術による活性化の研究発表展—を開催した。

本学と台東区は、伝統ある地場産業である皮革産業と連携し、高い付加価値のある新製品を目指すプロジェクトを実施している。今回は、皮革製品の中でも最も身近なアイテムである「財布」に焦点をあて、装飾/décor〈工芸科染織研究室〉、素材/material〈工芸科彫金研究室〉、隠喩/metaphor〈デザイン科機能・設計研究室〉、そして、空間/space〈デザイン科空間・設計研究室〉の四つの研究テーマから既成のスタイルにとられない新しい「財布」を提案することを目的とし、展示販売会を開催した。

伴い、「現代美術の東洋的なるものや伝統について—美術における伝統的な要素を現代芸術の中でどのように展開すべきか、考えるべきか—」をテーマとしたシンポジウムが開催され、また、震災復興支援のための慈善パフォーマンスとして、潘院長による作品の公開制作が行われた。潘院長は「鎮定勇毅」という書をしたため、「心は冷静沈着でありつつ、勇敢且つ力強く未来に進んでほしい」と日本へ向けてのメッセージを述べられた。

潘院長から宮田亮平学長へ記念作品が贈られるなど、改めて本学と中央美術学院との古く長い友好関係と、日本と中国の文化芸術分野における深い絆が確かめられる催しとなった。



藝大プロジェクト2011「元禄～その時、世界は？」
上:「江戸の音風景～歌舞伎と文楽」 下:「琳派の美、ロココのころ」 1

TOPICS OF
MUSIC

2011.02 - 07

音旬

1

藝大プロジェクト2011 「元禄～その時、世界は？」

三月十一日の東日本大震災以来、安全上の理由で演奏会開催を見合わせていた奏楽堂で、この五月から演奏会が再開された。

その口火を切ったのが、今年度から装いも新たにスタートした藝大プロジェクト「元禄～その時、世界は？」シリーズで、五月七日に第一回「江戸の音風景～歌舞伎と文楽」、五月十五日に第二回「琳派の美、ロココのころ」が開催された。

前期二回、後期三回の計五回のレクチャー&コンサートからなるこのシリーズは、エポックメイキングな時代を取り上げ、日本と世界を徹底的に比較することでの時代の芸術状況を明らかにしようという、音楽・美術両学部の垣根を越えた全学的なプロジェクトである。後期は十月八日の「西と東～もしも鎖国がなかったら」を皮切りに、三回の演奏会を予定している。

2

奏楽堂ホワイエ常設展示 荻原硯山「女」(ブロンズ複製彫刻) 除幕式

四月二十一日、本学奏楽堂において、荻原硯山の彫刻「女」の除幕式が行われた。

彫刻が有する物語性と具象彫刻が持つ一種の華やかさは、日々演奏会がおこなわれる奏楽堂ホワイエの広い空間に彩りを添えるにふさわし



奏楽堂ホワイエ常設展示 萩原碌山「女」(ブロンズ複製彫刻) 除幕式

右：萩原碌山「女」 左：奏楽堂ホワイエにおける除幕式

2



【映画音楽 研究と創作】シリーズ 監督小栗康平が語る映画音楽

音楽学部アトリエゾンセンターにて

3

く、常設として展示されることとなった。

この彫刻は、アーカイブ研究における最新のコンピュータ三次元画像処理技術を使い、東京国立博物館所蔵の重要文化財であるブロンズ彫刻、萩原碌山作「女」の復元研究をおこなった精緻な複製である。本物の芸術作品に手を触れることはできないが、この複製彫刻は、お客様が直接触れることが可能である。

3

【映画音楽 研究と創作】シリーズ 監督小栗康平が語る映画音楽

二月十九日、本学音楽学部アトリエゾンセンターで、「監督小栗康平が語る映画音楽」を開催した。アトリエゾンセンターでは映画音楽のシリーズ企画を継続して実施し、音楽と映画・映像との関係についてさまざまな角度から考える機会を設けており、今回の企画もその一環である。

今回は、国内外で高い評価を受ける映画監督、小栗康平氏をお迎えし、本学音楽学部の西岡龍彦教授らが聞き手となり、音楽と映画にまつわるさまざまなお話をうかがった。音楽が単に映画の中の情景やキャラクターの心情を伝えるというあり方にとどまるのではなく、むしろ現実と映画の世界を引き離して抽象化する役割を重視しているというお話など、小栗監督の哲学観があふれる興味深いお話であった。

後半には、小栗監督の代表作『眠る男』をフィルム上映し、会場のお客様からは「音楽を意識しながら映画を観ることで新たな発見があった」などの感想をいただいた。



『OPEN STUDIO 2011.05.07-08』
特別演習の成果発表展における展示風景

1



日仏学生交流「交流講座・ワークショップ」
「フェミス学生作品」: 下段右から“Yolan No Haru”“Lontano”
“A Billions Laughs”(3点とも@La Fémis)

2



アニメーション専攻第二期生修了制作展
『GEIDAI ANIMATION 02 SOURCE』
河野亜季「約束」

3

TOPICS OF
FILM AND
NEW MEDIA
2011.02 - 07

映旬



映画専攻第五期生修了制作展
横浜校地馬車道校舎にて

4



公開講座—馬車道エッジズ
「現代映像プロデュース論 2010
～最もホットな人の、最も新しいビジョン～」
「監督をつくる～プロダクションI.Gの戦略」風景

5

3

アニメーション専攻第二期生 修了制作展

「GEIDAI ANIMATION 02 SOURCE」

◎アニメーション専攻

五月五日から八日まで、本学横浜校地馬車道校舎において、アニメーション専攻第二期生修了制作展「GEIDAI ANIMATION 02 SOURCE」が開催された。

同展では、「SOURCE」(＝源)というテーマのもと、修士課程二年間の集大成である作品の上映を中心に、原画や人形、絵コンテなどの個人の制作過程を垣間見ることのできる展示をおこなった。また、シンポジウム「アニメーションの見方、語り方」では評論家の西村智弘氏、黒瀬陽平氏、津堅信之氏らを迎え、「アニメーション界のリーダーを作る」では本学の伊藤有志教授、岡本美津子教授、山村浩二教授による藝大アニメーション専攻三年間の試みについて語るトークセッションをおこなうなど、そのすべてを学生が企画し、映像におけるアニメーションの現在像を多視点から照らす試みとなった。

4

映画専攻第五期生修了制作展

◎映画専攻

五月二十一日と二十二日の二日間、本学横浜校地馬車道校舎において、映画専攻第五期生修了制作展が開催された。

当初は三月開催の予定で、先の東日本大震災の影響により延期されたものの、関係者のご協

力により五月に開催することができた。会期中は、修了制作五作品が上映され、両日共に入場者多数、盛況に終わった。

また、その後、七月七日から十五日までの間、ユーロスペース(渋谷)でのレイトショー上映もおこなわれ、同様に修了制作五作品が上映された。

5

公開講座—馬車道エッジズ

「現代映像プロデュース論 2010 ～最もホットな人の、最も新しいビジョン～」

◎アニメーション専攻

アニメーション専攻では、コンテンツの企画や事業スキームを設計するプロデューサーの役割に注目した公開講座をおこなっている。

一月二十八日から二月二十五日までの間、「才能発掘の場としてのフェスティバル」と題し、し広島国際アニメーションフェスティバルのディレクターである木下小夜子氏を、「インデペンデント監督のプロデュース論」と題し「イヴの時間」プロデューサーの長江努氏を、「アニメの製作スキーム」と題し電通の亀田卓氏を、「監督をつくる」プロダクションI.Gの戦略」と題し「GHOST IN THE SHELL」攻殻機動隊一のプロデューサー石川光久氏を、そして「NHK みんなのうた」壮大な才能開拓プログラム」と題し株式会社NHKエンタープライズエグゼクティブ・プロデューサーの飯野恵子氏をお招きし、本学の岡本美津子教授とともにプロデュース論を論じた。

当講座は横浜市の協力により今年度も継続予定。将来的には、プロデュース論の確立と、プロデューサーネットワークの構築をおこなうことをねらいとしている。

1

メディア映像専攻修士一年による 特別演習の成果発表展

「OPEN STUDIO 2011.05.07-08」

◎メディア映像専攻

メディア映像専攻の修士一年生による特別演習の成果発表展「OPEN STUDIO 2011.05.07-08」が開催された。

特別演習は、本学の藤幡正樹教授が三週間にわたり担当。カメラ・オブスキュラの制作にはじまり、ビデオカメラによる撮影・編集実習などを通して「映像とは何か」から「作品と他者性」について探索してきた。そして、演習における到達点として他者に見せる機会を設定し、特別演習の成果作品を普段の制作現場を展示空間に変えた「OPEN STUDIO」として発表した。

2

日仏学生交流 「交流講座・ワークショップ」

◎映画専攻

五月三十日から六月十日までの間、横浜校舎において、フランス国立映画学校 (La Femis) と大学院映像研究科による交流講座とワークショップが開催された。

この講座とワークショップは、映画プロデューサーを志す日仏両国の学生たちの交流を目的とし、在日フランス大使館の協力を得ておこなわれた。学生たちが広範な知見を得るとともに一線で活躍する映画人との繋がりをもてるよう、講座においては、実際に映画産業に携わる講師を多数招くという配慮がなされた。学生たちは授業内外を問わずお互いの親交を深め合った。

山田和樹

「スイスの名門オーケストラで
新たな地平に挑む」



スイス・ロマンド管弦楽団 首席客演指揮者に就任予定

二〇一二年九月にスイス・ロマンド管弦楽団の首席客演指揮者に就任が決定しています。大きな肩書をいただき、いま身が引き締まる思いでいるところです。昨年六月十日、急な代役を一週間前に打診され、スイス・ロマンド管弦楽団で指揮をすることになりました。それがちょうど次期音楽監督を探している時期であったようで、その演奏会の一週間後、家族に「将来、スイス・ロマンド管弦楽団の音楽監督などできたら夢のようだね」と話していたら、その直後に音楽監督の就任を打診する電話があったのです。

しかし、音楽監督は楽団のオーガナイズや、経営的なことなどもしなければなりません。僕は楽団の本拠地、ジュネーブで主に話されるフランス語も堪能ではありませんし、時期尚早ということで音楽監督はお断りしたのです。ところが、わざわざ首席客演指揮者というポストをつくってまで迎え入れてくださいました。スイス・ロマンド管弦楽団の音楽監督はネーメ・ヤルヴィ先生という八〇歳を超えた大ベテランの方ですから、ゲストの僕が若い指揮者でちょうどよいバランスになったかもしれません。

「横浜シンフォニエッタ」と ブザンソン国際指揮者コンクール

学生時代は忙しかったという印象しか残っていません。勉強だけでなく、アマチュアオーケストラの指揮、オペラのアシスタントなど、いろいろな仕事も並行しておこなっていました。学部四年生のときは一日の睡眠時間が二、三時間、食事もうろくにとらない状態で、上野のキャンパスをいつも走っていましたね(笑)

藝大在学中に結成した「横浜シンフォニエッタ」は、じつは藝大に代表されるアカデミズムに対する反発から生まれたものです。芸術表現には心が自由であることが求められますが、特定の型やセオリーを押し付けられると両者の間で板挟みになってしまふ。そういう気持ちのわだかまりから自分でオーケストラをつくることにしたのです。

いざ始めてみると、意外と僕の考えに賛同してくれる人がいて、多くの藝大生が集まり、ベートーベンの交響曲を、全曲曲順に演奏するなどということをしていました。当時は練習のための部屋を借りる手続がとて



左：演奏中の山田和樹氏
右：山田和樹&横浜シンフォニエッタ
「モーツァルト《交響曲第41番「ジュピター」》、ビゼー《交響曲》」

も大変で、仕方がなく廊下に立って練習をしたこともありました。

じつは、僕はコンクールにあまりよい思い出がないのです。日本でコンクールに応募しても、第一次審査の書類選考とビデオ選考で落選してしまう。「プザンソン国際指揮者コンクール」のよいところは、第一次選考から実際に指揮の実技を見てくれるところです。予選は世界数か国でおこなわれ、課題曲を指揮して、リハーサルをおこなうという審査です。二〇〇七年(第五十回)の一次審査はロシアのサンクトペテルブルクで受け(このときは二次審査で落選)、二〇〇九年(第五一回)にはドイツのベルリンで受け、この二度目のトライで優勝し、併せて聴衆賞もいただきました。プザンソンは指揮者の雰囲気まで含めて判断してくれるコンクールで、僕はこのコンクール以外での優勝は難しかったと思います。

ところで、優勝したことはとてもうれしかったものの、喜んでいられたのはほんの三分ほどでした。優勝者は翌日にはスイスへ行き演奏会をおこなうよう、スケジュールが組まれているのです。コンクールのプレッシャーもすごかったですが、「お披露目演奏会」で、またさらにすごいプレッシャーをかけられるというわけです。

若いときは貪欲に取り組み行動してほしい

ハングリー精神や、貪欲さが必要だと思うのです。音楽には。僕がまだまだ覚えているのは、藝大の入学式の挨拶で当時の澄川学長が「皆さん、おめでとうございます。いまここにおよそ二五〇人の新入生がいますけれど、この中で残れるのはたった一人だけです」というようなお話をされたのです。芸術の世界では、二四九人はその一人を支えるためにいる、ということが話された。まだ入学したばかりの学生に対して「厳しい世界だから肝に銘じておきなさい」ということだと思うのですが、いまでも大変印象に残っています。

僕が「横浜シンフォニエッタ」を結成したときはまだ学生でしたから、知識も経験もなく、それほど指揮がうまいわけでもなかった。しかし、音楽が好きという気持ちは人一倍強かったですし、絶対に音楽をやりたい、指揮者になりたいという強い意志を持っていました。当時は、「悩むくらいならオーケストラをつくってしまえ」というように勢いに任せて行動していました。お陰で演奏会をおこなうことがどれだけ大変かということもわかったのです。

僕もまだ若いですが、十代や二十代のプロを目指す皆さんには、とにかく貪欲に行動してほしいです。若いときは体力があり、寝なくても平



気です。僕は二十代におこなったことに全く悔いはないです。よく遊び、よく学び、よく音楽をし、しかも友人にも恵まれました。澄川学長がおっしゃったように、芸術家は支えてくれる人がいるからこそで、自分の才能だけでは絶対にやってはいけません。格好などつけずに、とにかくがむしやりに、おこないたいと思ったことをすぐ行動に移してほしいと思います。

やまだ・かずき

1979年、神奈川県生まれ。東京藝術大学音楽学部指揮科卒業。指揮法を松尾葉子・小林研一郎の両氏に師事。2009年、第51回プザンソン国際指揮者コンクールに優勝、併せて聴衆賞も獲得。ただちにモントルー＝ヴェヴェイ音楽祭にてBBC交響楽団を指揮してヨーロッパデビュー。同年、ミシェル・ブラッソンの代役でバリ管弦楽団を指揮、再演が決定する。これまでに、サイトウキネンオーケストラをはじめ、日本国内主要オーケストラ、BBC交響楽団、BBCナショナル・ウェールズ管弦楽団、バリ管弦楽団、ルーアン歌劇場管弦楽団、スイス・ロマン管弦楽団、ベルリン放送交響楽団、サンクトペテルブルグ交響楽団、ウラルフィルハーモニー管弦楽団など客演。現在、NHK交響楽団副指揮者、オーケストラ・ファンサンプル金沢ミュージック・パートナー、横浜シンフォニエッタ音楽監督、東京混声合唱団レジデンシャル・コンダクター。ローム・ミュージック・ファンデーション在外音楽研究生としてベルリンに在住。2012/13シーズンより、スイス・ロマン管弦楽団首席客演指揮者に就任予定。



藝大の教員たちが、
日々の研究やレッスンに勤しむ
「研究室」のなかには
どうなっているのだろうか？
なかなか見る機会のない
部屋を潜入ルポする。

美術学部工芸科 陶芸研究室 島田文雄教授

Department of Crafts, Ceramics
Professor SHIMADA, Fumio

研究室探訪

第二回

Visiting the Laboratory

「轆轤場」と呼ばれる木製の小さな作業場に坐って、学部三年生から院生までが、自分たちの作品制作に取り組んでいる。陶芸研究室では、窯を全員で共有し利用する点特徴的だ。轆轤場では、下級生が隣の上級生からアドバイスを受ける姿を見かける。月に一度の釉薬づくりも全員でおこなう。大勢で作業をすることが多いため、学生たちは「家族的な雰囲気」で、先生との距離も近い」と口々に言う。こういう陶芸研究室ならではの人間関係を「同じカマの飯を食う」と言うのだそう。

島田文雄教授をはじめ他の教員も、「実技の世界は口で教えても意味がない」と、実際に土をこね、絵付けをして手本をみせる。教員の多くも第一線で活躍する作家なのだ。

工芸科には学部二年次の前期に、「実材実習」通称「どさ回り」という授業があり、学生は科が設ける六つの専攻（彫金・鍛金・鍍金・漆芸・陶芸・染織）から三つを選び、実際に素材に触れ制作することで三年次からの進路を決める（学部二年次後期は専攻基礎課程）。陶芸専攻を選んだ理由を学生に尋ねると「土」という素材は、自分の手でゼロからつくることができるから」という答えが多く聞かれた。

島田教授は、もともと北欧家具のデザインに興味があり本学に入学したが、実習をとおして陶芸の道に進むこととなったそう。土だけを渡され五日間で好きなものをつくる課題で、当時の田村耕一教授から「無心になれるだろう」と陶芸の魅力を教えられた。土をこね轆轤を回していると、我を忘れるほどに没頭し、



無我の境地を味わうことができたことが陶芸を選んだ理由という。

陶芸研究室が工芸科の他の研究室と異なる最大の特徴は、成型し絵付け、釉掛けをしたあと、最後に窯に入れて「焼く」という行程があることだ。作品を窯に入れた後は全てを火に委ねる。作品のできあがり完璧には予想できない「偶然性」が、陶芸の怖さであり、大きな魅力なのだ。

陶芸研究室の学生は大学院へ進むと、修士一年次に取手校地で自分たちで窯を設計し、レンガを積み、窯をつくる授業「築炉制作実習」がある。これはまさに陶芸の原点を知るよい機会だ。陶芸はそもそも「野焼き」から始まり、中世には穴を掘って窯

で焼くようになった(穴窯)。その後、現在見られる「登り窯」が定着する。つまり、自分で窯を制作することで、先人たちの苦労を知り、火の造形の根本にあるものを体で覚えるのである。

陶芸研究室では国際交流がさかんて、現在八人の留学生が在籍している。今年九月には、本学美術学部の主催で「国際陶芸シンポジウム 2017 in Japan」が開催される予定である。世界九か国約三十大学が参加予定で、本学大学美術館陳列館では「国際陶芸展」、陶芸研究室では「教員デモンストレーション」、「国際学生陶芸ワークショップ」という催しがおこなわれるそうだ。



「轆轤場」を隣り合う上級生と下級生、また教員と学生が「同じカマの飯を食う」関係を築く親密な空間。



3 閑々亭
もともとは藤堂高虎が建てた寒松院の茶室だった。寒松院は一八六八年に彰義隊の戦いで焼け、一八七八年に閑々亭だけが復旧され、その後たび重なる補修のうえ現在に至っている。

4 旧正門
設計者の新家孝正(一八五七年〜一九二〇年)は、明治大正期に活躍した建築家。京都の「無鄰庵・洋館」(一八九八年)や、片山東熊「東京国立博物館・表慶館」(一九〇八年)などが知られている。



問い合わせ先
上野動物園 案内係
〒110-8711 台東区上野公園9-83
Tel03-3828-5171(代) Fax03-3828-6475
<http://www.tokyo-zoo.net/zoo/ueno/>



5 サーライタイ
タイの国家アーティストである建築芸術家アーウット・グンチューグリオン大佐が設計した。「サーライタイ」の建立は、東京都の協力により、タイ政府外務省・文化省が進行したプロジェクトであった。

閑々亭にいたる猛禽舎の手前、東京都美術館の西裏にあたるには、「旧正門」がある。一九二二(明治四十五年)に完成した表門は新家孝正設計。現在の旧正門は一九三四年(昭和九年)に完成。かつて存在した京成本線「博物館動物園駅」から来場者がアクセスしたなごりがある。東京国立博物館の西端に入り口の外観だけをとどめるこの駅は一九九七(平成九年)に営業休止となった。

二〇〇七(平成十九年)、日タイ友好二〇周年を機にタイ政府から寄贈された「サーライタイ」(タイ風東屋も目を惹く。サーライは、タイ独特の屋根や飾りを備え国の象徴とされ、アジアンウ舎の近くで絢爛とした輝きを見せている。



東京都美術館のあるあたりが、藤堂高虎に与えられた。その後、寛永寺建立にあたって、高虎は土地を幕府に返上するとともに、屋敷跡に寒松院を建てて寄進。寒松院で休息をとる三代将軍家光の接待のために、高虎が建てたのがこの茶室だ。

上野の杜の 波瀾 万丈

第十二回

日本美術の保護 前篇

吉田千鶴子

薬師寺の国宝月光菩薩像事件をめぐる、文化財専門審議会専門委員として、また古美術を大切に思う一国民の立場から警鐘を鳴らした上野直昭学長の真意とは。

激怒する学長

上野直昭は戦時下の文部省による東京美術学校(美校)改革断行(本誌二〇号参照)により同校校長となり、一九四九(昭和二十四)年の東京藝術大学(藝大)発足とともに学長に就任し、藝大草創期の運営に大きな力を発揮した人だ。美学・美術史学者であり、潔癖にして冷静沈着、指導者の資質に富む人格者と目されてきた。この人が在任中に一度だけ(管見の限りだが)怒りに駆られてマスコミに抗議文を投じたことがあった。それは一九五二(昭和二十七年)年十二月の『芸術新潮』に寄稿した長文の「文化財は保護されてゐるか——薬師寺月光菩薩の問題をめぐって——」である。

国宝薬師寺薬師三尊の脇侍月光菩薩の美しさはよく知られているが、頸部に問題があり、一九五二年の吉野地震以後、頭部落下の危険が生じた。それを文化財保護委員会に属する技官が委員会に諮ることなく頸を切断し、頭部から

胴体まで通っていた心棒も切断してしまい、委員会にその報告もしなかった。文化財専門審議会専門委員の上野学長はそれを知って驚き、文化財保護法の現状変更に関する規定に違反する行為と見做し、専門委員としての責任上、また古美術を大切に思う一国民の立場から保護関係者に猛省を促そうと、痛烈な抗議文を公表したのであった。『東京芸術大学百年史』東京美術学校第三巻別巻『上野直昭日記』に全文を収録しておいたのでご参照いただきたい。抗議の結果はというと、この問題も一九四九年の法隆寺金堂壁画焼失のときと同様に、一部関係者の処罰をもって片付けられてしまったので、彼は専門委員を辞任した。

抗議の理由

京城帝国大学教授在任中の一九四〇(昭和十五年)年に国宝保存会委員となつて以来、上野直昭は帝室博物館顧問、正倉院評議委員会、国立博物館評議員、文化財専門審議会委員、そし

て短期間だが東京国立博物館長(藝大学長兼任)をつとめ、保護行政に深く関わってきた。痛恨極まりない法隆寺金堂壁画焼失事件を契機に翌年には文化財保護法が制定され、それによって従来よりも厳正な保護がなされると思っていた矢先に月光菩薩事件が勃発したのであるから、彼が愕然としたのも無理はない。

人一倍強硬な姿勢をとつたのは、自分が明治期における古美術保護制度樹立の際のトップ官僚九鬼隆一の甥であり、九鬼の片腕であった岡倉天心の後継者のポジションを占めている者としての矜持にもよるのだろう。また、折しも開国百年記念文化事業会の企画による『明治文化史』の第八巻美術編(一九五六年、洋々社)の主任として近代日本美術教育・行政史の執筆に取り組み、天心の業績の歴史的意義を再認識したときだったから、その後継者として取って代る必要を示す必要があると思つたのかもしれない。さらに、月光菩薩となると、上野学長にはクールに看過しえない特別の事情もあった。彼は東大助手時代に天心の講義を聴いて強い感銘を受けたことを自著『邂逅』(一九六九年、岩

波書店)に書いてある。その講義は古美術と対面したときの感動そのものが伝わってくるようであったといい、

ある時又こんなことを言われました。「諸君がまだ薬師寺を見たことがないとすれば、諸君は幸福だ、あの薬師三尊が与へてくれた、美しい色沢の第一印象は、私にはもう二度とくり返すことはできない」と。

と講義の一端を紹介している。満場をうならせた天心のこの言葉を胸に秘めて、彼は何十回も薬師寺を訪れ、薬師三尊に直面して嘆賞したという。美術に従事する者にとって美術品そのものを実際に見て感動することが一番大切であることを彼は天心に教えられたのだ。

そうした思い出のまつわる薬師三尊は彼にとって格別尊いものであり、そのなかの月光菩薩にためらいもなく手が加えられたのであるから、一層怒りが強かつたのであろう。

文化財保護、特に保存修復の研究・教育について



2



3



4



1

1. 薬師寺薬師三尊像のうち月光菩薩像(薬師寺所蔵写真)
2. 上野直昭 3. 岡倉天心 4. 矢代幸雄(仁田三夫氏撮影)

上野学長はこのような人であったから、美術・工芸品の材料や技術、修復保存の研究の促進に熱心で、そのための「総合研究施設」設置の概算要求を一九五四(昭和二十九)年に出した。しかし認可されず、その種の研究は各科内部、あるいは教官個人の研究室で進める以外にない状態が続いた。一九六〇(昭和三十五年)年になって、文化財保護委員会から委員長代理矢代幸雄を介して美術・工芸部修理技術者養成の特別要請(前出百年史美術学部篇に収録)があった。矢代は長く母校の美術史教授をつとめ、本学の事情に通じていた人で、要請は修理技術者の減少・高齢化および近年の化学製品の使用などに対処するため、研究蓄積のある本学に高度な技術者養成教育を開始してほしいというものだった。これが効を奏してか、一九六三(昭和三十八)年の大学院修士課程設置の際に保存技術講座が開設され、さらに上野学長退官後、引き続き保存科学講座、日本画古典模写講座、油画技法材料講座などが開設され、文化財の調査や模写、保存修復の活動が活発化した。また、時とともに他機関、国外との研究協力も進展し始めた。そうした状況の下で、天心の昭和の申し子と呼ばれた平山郁夫学長の時代が到来し、その在任中の一九九五(平成七)年には先の「総合研究施設」構想が文化財研究所との提携というかたちで不完全ながらも実現し、大学院美術研究科文化財保存学専攻という包括的な組織が誕生した。天心が中尊寺金色堂修繕(次回に記す)によって修復事業に先鞭をつけてからすでに二世紀あまりが過ぎていた。(次号につづく)

(よしだ・ちづこ／美術学部教育資料編纂室講師)

次号予告

「日本美術の保護 後篇」 吉田千鶴子

文化財保護の始まりと岡倉天心およびその周辺の人々による古美術品の調査・保護・修復活動の概要を紹介する。

TOPIC
1

彫刻の時間 — 継承と展開 —

Time in Sculpture — the succession and transition —

東京藝術大学美術学部彫刻科は120年以上の長い歴史を持ち、竹内久一と高村光雲の二人の教授の指導から始まった教育も幾多の改革を経て、数多くの彫刻家を輩出し、現在に至っています。この展覧会は彫刻科が企画する展覧会で、内容は2部構成となっており、ひとつは、芸大コレクションから選別された作品で、飛鳥・白鳳時代の仏像から近現代までの日本彫刻の歴史を一望します。もうひとつは、彫刻科の名誉教授と現職教員の作品を展示します。空間を意識的に使い、現代の彫刻のあり様と個々の作家の彫刻観の違いを提示するもので、これによって、古代から近代までの伝統彫刻から何が現代彫刻に継承されたのかなどを再考察しようという試みです。

展覧会の「目玉」のひとつとして、橋本平八の作品17点と平榊田中の作品29点が同時に展示されます。この二人は、明治時代に西欧から導入されてその後大きな潮流となった近代塑造彫刻と比較する上でも、日本の彫刻の独自性を検証する上でも、今あらためて注目されている彫刻家です。

展覧会関連イベントとして、講演会、シンポジウム、彫刻科によるギャラリートークを行います。多くの方々の御参加をお待ちしております。



快慶 大日如来坐像 東京藝術大学蔵



竹内久一 伎芸天 東京藝術大学蔵

展覧会スケジュール (2011年7月31日現在の情報です。今後予告なく変更することがございます。)

大学美術館本館

9月9日(金)～9月25日(日)	国宝 源氏物語絵巻に挑む —東京藝術大学 現状模写—	入場料：一般500円 学生300円(中学生以下は無料)
9月9日(金)～9月25日(日)	区長賞創設30周年記念 台東区コレクション展(後期)	入場料：無料
10月7日(金)～11月6日(日)	彫刻の時間 —継承と展開—	入場料：一般1,000円 学生600円(中学生以下は無料)
11月17日(木)～12月4日(日)	高山登教授退任展(仮称)	入場料：無料
12月11日(日)～12月21日(水)	東京藝術大学大学院美術研究科博士審査展	入場料：無料
1月29日(日)～2月3日(金)	第60回東京藝術大学卒業・修了作品展	入場料：無料

陳列館

8月30日(火)～9月11日(日)	ICHIKENTEN2011	入場料：無料
9月19日(月・祝)～9月25日(日)	国際陶芸教育交流展	入場料：無料
10月4日(火)～10月23日(日)	モチハコブカタチ	入場料：無料
10月27日(木)～10月30日(日)	東京スカイツリー®を描く 絵画展(仮称)	入場料：無料
11月(未定)	東京藝術大学日本画第二研究室「絵絹に描く」発表展(仮称)	入場料：無料
12月11日(日)～12月21日(水)	東京藝術大学大学院美術研究科博士審査展	入場料：無料
1月29日(日)～2月3日(金)	第60回東京藝術大学卒業・修了作品展	入場料：無料

正木記念館

予定はございません。

※ 開館時間は、10:00～17:00(入館時間は16:30まで)。
ただし、月曜日が祝日の場合は開館し、翌日に休館することがあります。
なお、展覧会によっては、開館時間および休館日が異なる場合がございますので、その都度ご確認ください。

※ 展覧会の名称・会期については、変更することがございます。

※ 本学には駐車場はございませんので、お車でのご来館はご遠慮ください。

※ 展覧会についてのお問い合わせ先
● ハローダイヤル TEL: 03-5777-8600
● 大学美術館 TEL: 050-5525-2200

※ 展覧会の紹介は、下記ウェブサイトでご覧になれます。
<http://www.geidai.ac.jp/museum/>

演奏会スケジュール (2011年7月31日現在の情報です。今後予告なく変更することがございます。)

奏楽堂

10月1日(土)	藝大オペラ第57回定期公演「コジ・ファン・トゥッテ (女は みんなこうしたもの)」1日目	14:00開演	3,000円	指定席
10月2日(日)	藝大オペラ第57回定期公演「コジ・ファン・トゥッテ (女は みんなこうしたもの)」2日目	14:00開演	3,000円	指定席
10月7日(金)	藝大フィルハーモニア定期新卒業生紹介演奏会	18:30開演	1,500円	自由席
10月8日(土)	藝大プロジェクト2011「元禄～その時、世界は？」第3回 西と東～もしも鎖国がなかったら	〈レクチャー〉15:00～ 〈コンサート〉16:30開演	2,000円	自由席
10月15日(土)	藝大プロジェクト2011「元禄～その時、世界は？」第4回 オスマン帝国の栄光～トルコ行進曲の秘密	〈レクチャー〉15:00～ 〈コンサート〉16:30開演	2,000円	自由席
10月16日(日)	多美智子退任記念演奏会	15:00開演	無料	自由席
10月21日(金)	藝大フィルハーモニア定期演奏会	19:00開演	2,000円	自由席
10月29日(土)	東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校第23回定期演奏会	14:30開演	無料(事前申込制)	自由席
10月30日(日)	藝大プロジェクト2011「元禄～その時、世界は？」第5回 二人の巨人～パッハと八橋検校	〈レクチャー〉15:00～ 〈コンサート〉16:30開演	2,000円	自由席
11月5日(土)	ハイドン・シリーズ 室内オーケストラ演奏会	15:00開演	2,000円	自由席
11月6日(日)	うたシリーズXI イタリア歌曲の楽しみ	15:00開演	2,000円	自由席
11月11日(金)	藝大大学生オーケストラ定期演奏会第45回	19:00開演	1,500円	自由席
11月12日(土)	ハイドン・シリーズ 室内演奏会	15:00開演	2,000円	自由席
11月18日(金)	藝大フィルハーモニア・合唱定期	19:00開演	2,000円	自由席
11月19日(土)	藝大アートスペシャル2011「学長と語ろうX」 ゲスト：山田洋次(映画監督)	15:00開演	無料(事前申込制)	指定席
11月20日(日)	藝大アートスペシャル2011「障がいとアート」～中国の天才画家、羅(ロウ)錚(ツェン)を迎えて	15:00開演	無料(事前申込制)	指定席
11月23日(水・祝)	藝大定期吹奏楽第77回	14:00開演	1,500円	自由席
11月30日(水)	邦楽定期演奏会第78回	17:30開演	2,000円	自由席
12月18日(日)	藝大21 創造の杜'11 藝大現代音楽の夕べ	15:00開演	2,000円	自由席
1月7日(土)	同声会新人演奏会 <第1回> 古楽・ピアノ・弦楽器	14:00開演	2,000円	自由席
8日(日)	<第2回> 邦楽・管打楽器・声楽	14:00開演	2,000円 (第1回・第2回共通券)	自由席
2月4日(土)	藝大定期室内楽第38回 第1日	14:00開演	1,500円	自由席
2月5日(日)	藝大定期室内楽第38回 第2日	14:00開演	1,500円	自由席
2月11日(土)	藝大チェンバーオーケストラ定期第18回	15:00開演	1,500円	自由席
2月22日(水)	藝大21 和楽の美 邦楽絵巻「悟空・韓国(からくに)めぐり」	18:30開演	3,000円	指定席
3月16日(金)	北川暁子退任記念演奏会	19:00開演	無料	自由席
3月17日(土)	守山光三退任記念演奏会	15:00開演	無料	自由席
3月18日(日)	安藤政輝退任記念演奏会	15:00開演	無料	自由席
3月19日(月)	伊原直子退任記念演奏会	19:00開演	無料	自由席
3月20日(火・祝)	杉木峯夫退任記念演奏会	15:00開演	無料	自由席
3月22日(水)	三浦正義退任記念演奏会	18:30開演	無料	自由席
3月27日(火)	東京藝術大学アジア総合芸術センター事業 日中青少年交流演奏会	開演時間未定	無料	自由席
3月31日(土)	藝大21 第6回奏楽堂企画学内公募演奏会 サーバ/周辺/世界イブセン、グリーグ(パール・ギュント)による音楽劇	15:00開演	無料(要予約)	自由席
モーニング・コンサート 11月10日、24日、12月8日、2012年2月9日、16日(いずれも木曜日)		11:00開演	無料(要整理券)	

※ 特にお断りのない限り、コンサートの会場はすべて本学構内の奏楽堂です。

※ 詳細につきましては、9月末発行予定の「平成23年度コンサートスケジュール(後期版)」をご覧ください。

※ 演奏会の曲目、開演時間などの詳細については、決定次第、大学ホームページで発表いたします。http://www.geidai.ac.jp/

※ 本学には駐車場はございませんので、お車でのご来館はご遠慮ください。

※ スケジュール・曲目・出演者等は都合により変更となる場合がございますので、ご了承ください。

※ チケットの取り扱い

- 藝大アートプラザ TEL: 050-5525-2102
- ヴォートル・チケットセンター TEL: 03-5355-1280 http://ticket.votre.co.jp/
- チケットぴあ TEL: 0570-02-9999 http://t.pia.jp/ (一部携帯電話・PHS・IP電話はご利用いただくことができません。)
- 東京文化会館チケットサービス TEL: 03-5685-0650 http://c11sbany.securesites.net/ticket/
- イープラス(e+) http://eplus.jp/

※ 演奏会についてのお問い合わせ先

- 演奏芸術センター TEL: 050-5525-2300
- 音楽学部附属音楽高等学校 TEL: 050-5525-2406



羅錚：ドビュッシー作曲「海」を聴いて

TOPIC 2

藝大アート・スペシャル 2011

演奏芸術センターでは、障害のある人もそうでない人も共に楽しめるアートのあり方をテーマに、11月19日と20日の両日にわたり「藝大アート・スペシャル2011」を開催いたします。

初日は宮田学長のトークが話題の「学長と語ろう」で、ゲストは映画監督の山田洋次さんです。山田監督は映画『学校』シリーズで、障害者と健常者の共生について貴重な提言をされています。そして

翌日は、中国より羅忠鎔・羅錚父子をお招きします。息子の画家・羅錚さんはダウン症ですが、ドビュッシーの交響詩「海」を聴いて『海』という絵を描きました。一方父親の作曲家・羅忠鎔氏は、その絵に触発されて『羅錚の絵』を作曲しました。これらをシルヴァン・カンブルラン指揮の藝大フィルの演奏でお聴きいただけます。

交流

◆連携に関する覚書締結

三月七日、本学社会連携センターと山梨県北杜市は芸術、文化、教育、まちづくり等を通じ地域社会の活性化に寄与することを目的とした連携に関して合意し、北杜市役所にて、本学宮廻正明社会連携センター長と白倉政司市長が、覚書に署名した。

北杜市には、平山郁夫シルクロード美術館や本学の北川原温教授が設計した中村キース・ヘリング美術館が所在するほか、これまでも、教員が講師となり市内の児童向けに絵画教室を開いたり、教員が同市を研究フィールドとするなどの連携関係があった。今後、地域貢献の各種事業、教育及び人材育成等に関し、市と協議を進めていくこととなる。



受章・受賞

◆高山登教授、林武史准教授が「第六回円空大賞」円空賞を受賞

四月二十日、美術学部先端芸術表現科の高山登教授及び彫刻科の林武史准教授が、立体造形、絵画、映像等の分野で、めざましい活躍をし、「円空」を彷彿とさせる顕著な業績をおさめている芸術家を顕彰する第六回円空大賞円空賞を受賞した。

受賞にあたり、高山登教授は「主として使い古した鉄道の線路の枕木をもって作品を作る。この鉄道という文明の利器に長い間圧殺されてきた枕木にあたかも生命の根源を見ているかのように、その枕木を組み合わせて、不思議な風景を現出する。枕木はあたかも人間や動物や草木のように命をもち、圧殺されたその生命の再生を訴えているかのような」と評された。

また、林武史准教授は「石を素材としているが、その石は空に屹立する石ではなく、地にささやかに並べられた石である。その石によって水田や歩く人などを表現する。これらの作品の中には日本人に寄せる愛情とユーモアがあふれているように思われる。」と評された。

◆藤原信幸准教授が「国際ガラス展・金沢2010」奨励賞を受賞

美術学部工芸科ガラス造形の藤原信幸准教授の作品「小文間の植物」シリーズ2010-01「Plant of Omomura Village-2010-01」が、国際ガラス展・金沢2010において奨励賞を受賞した。

受賞作品については「色も重く、また素材もとても重いガラスのような感じだが、下に敷いてある黒く塗られた板を一枚重ねたものが、今までにない新しいものという印象」と評された。

◆小谷元彦准教授が「第二十五回平樹田中賞」を受賞

美術学部先端芸術表現科の小谷元彦准教授が、「新しい時代の彫刻の領域を開拓している活動全体」を評価され、第二十五回平樹田中賞を受賞した。

「小谷元彦展 幽体の知覚」を中心とする活動における、樹脂による立体や映像など多様な表現手段を用いつつ彫刻の概念を超えようとする試みが、高く評価されたもの。

◆村岡貴美男助教が「再興第九十五回院展 日本美術院賞(大観賞)」を受賞

美術学部絵画科日本画の村岡貴美男助教の作品「曼珠沙華」が、「構成に強い執着を持ち、形態は写実を主としているが、それらの組み合わせの微妙な重なりやずれが生じるところに、事実にとられず自由な発想の色感を散らしていく。するとそこに思いもよらぬ空間の構成が生じ、画面は謎解きの魅力をたたえる」と評され、再興第九十五回院展において日本美術院賞(大観賞)を受賞した。

出版会活動

◆DVD「アニメーション専攻 第二期生修了作品集2011」を三月十九日より発売

二〇一一年三月に修了したアニメーション専攻第二期生。修了制作十一作品及び一年次制作十一作品を収録しDVDとして発売。若く未完成ながらも独創性に富んだ十一の視点で、学生たちが二年間を費やして探求した「アニメーション表現との対話」。その成果物として生まれた短編作品群は、耳慣れた「アニメーション」のイメージから軽々と私たちを解放して、より自由で広大な「ANIMATION」表現のステージを予感させる。



◆「ルネサンスのエロティック美術」を三月二十五日より発売

本書は、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ティツィアーノら、代表的な芸術家たちによるエロティックな表象をめぐって、日本・イタリア・アメリカの八人の研究者による最新の論考を収めた論集である。



◆「音響技術史」の音の記録の歴史」を三月二十八日より発売

音を記録するということは、古代から人類の夢であった。本書は、この夢を実現した人々の歴史をたどる。

エジソンの蓄音機からCD、そして最新のSACDやデジタル・オーディオ・プレーヤーの誕生まで、様々なエピソードを交えて当時の最先端技術の誕生の過程をまとめている。アナログからデジタルに移行する現場のまっただ中で活躍した著者の生の体験は、音響の歴史をたどる上での貴重な資料となるはずである。

音響を学ぶ学生の教材としてだけでなく、一般のオーディオファンにとっても大いに楽しめる内容となっている。



東京藝術大学出版会の出版物等は、本学藝大アートプラザ、アマゾン(ネット販売)および一般書店にて取り扱っております。詳しくは、藝大アートプラザ(〇五〇一五二五二一〇二)まで

この度の「東北地方太平洋沖地震」により、被害に遭われた皆様方に対して、心からお見舞い申し上げますとともに、被災地の一日も早い復旧を心からお祈り申し上げます。

◆東北地方太平洋沖地震に係る義援金
「芸大震災義援金」

三月二十二日から四月二十二日までの間、本学では、被災者救援、復興支援のために「芸大震災義援金」として義援金の受付をおこなった。

四月二十二日現在で、口座振込および募金箱へのご寄附を合わせ、九九万一千六八円のご支援があり、日本赤十字社へ「東日本大震災義援金」として送金した。

本学では、充分な被災者支援と一刻も早い復興を願っており、上野校地の「奏楽堂」においては、引き続き募金箱を設置している。

◆平成二十二年度「卒業式」の中止

本学では、今回の地震による深刻な影響を考慮し、式典を実施することの可否について、ぎりぎりまで検討を重ねたが、三月二十五日に実施予定であった「卒業式」を中止した。

地震により被災者の方々が困難な状況にあること、今後の災害発生に予断を許さないこと、電力供給量低下による混乱等の中で式典を実施するにあたり学生・保護者の皆様の安全の確保が困難と考えられることから中止の判断に至った。

「卒業式」の中止に伴い、宮田学長は「学長からのメッセージ」を動画配信し、卒業・修了生へのメッセージを送った。その中で、「歩」という字を揮毫し、社会に向けて一歩一歩踏みしめ足跡を残すことで、卒業・修了生が歴史をつくり、日本復興の力としてほしいと述べた。

◆平成二十二年度「入学式」の取りやめ

卒業式と同様、四月五日に実施予定であった「入学式」を取りやめた。

「入学式」の取りやめに伴い、宮田学長は「学長からのメッセージ」を動画配信し、新入生へのメッセージを送った。その中で、「協」という字を揮毫し、本学入学生までに多くの人が支えた力、本学で学んで身につける力、そして、卒業後に得られる大きな文化芸術における力、三つの力が重なり合い大きな力となる。それらを身につけ、世の中に飛び出し、社会に豊かな潤いをもたらす存在になってほしいと述べた。

◆東京藝大教員有志による

被災地復興支援・文化財救援 作品展

六月一日から七月十日までの間、東日本大震災の被災地の復興支援と文化財の救援をおこなうことを目的とし、東京藝大の教員有志がそれぞれの作品を本学藝大アートプラザに持ち寄り、「東京藝大教員有志による被災地復興支援・文化財救援 作品展」を開催した。

開催期間中、作品は飛ぶように売れ、売上金は公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団へ寄附された。

十月四日から十月十日の間にも、同展の第二回開催が予定されている。

◆学長と語ろう区

奏楽堂トーク&コンサート

六月十八日、第九回「学長と語ろう 奏楽堂トーク&コンサート」がゲストに「リストラテアルポルト」のオーナーシェフである片岡護氏を招いて開催され、約七〇〇名のご来場のお客様が約二時間にわたり対談と演奏会を楽しんだ。

第一部は「食としての美」と題し、「リストラテアルポルト」の美しい料理の数々が次々とスクリーンに映しだされるなか、片岡氏のこれまでの経験や「食」についての思いが語られた。

高校生のころに、東京藝大工芸科のデザイン部門への進学を志していた、と東京藝大との意外なつながりを打ち明け会場を沸かせる一方、藝大進学をあきらめ料理人の道へ進むことに大変悩んだ際、当時通っていた予備校の先生に「デザインも料理も同じ。料理はお皿の上でデザインできる」と言われ、絵筆を包丁に持ちかえることに決めた、など驚きのエピソードを披露した。



第二部では、対談のお礼として、「イタリアン・音楽・ティナー」本日のメニュー」と題しコンサートが開かれ、ダグラス・ボストック特別招聘教授の指揮により本学音楽学部学生オーケストラがイタリアに縁のある名曲の数々をイタリアンのコース料理になぞらえて演奏。ご来場のお客様の心を遠くイタリアへと誘い、大盛況のうちに幕を閉じた。

次回、第十四回「学長と語ろう 奏楽堂トーク&コンサート」は、ゲストに映画監督の山田洋次氏を迎え、十一月十九日(土)に開催予定。

◆藝大フレンズ加入者状況

加入者数 金成二十三年七月三十一日現在
賛助フレンズ個人二三七名 法人五団体
特別賛助フレンズ個人二名

◆今年度上半期に開催された

主な展覧会、演奏会記録
《大学美術館》

「香り かぐわしき名宝」展

会期 四月七日～五月二十九日
入場者数 四万七千四百六名

芸大コレクション展「春の名品選
会期 四月七日～五月二十九日
入場者数 三万八千七百一〇名

《奏楽堂》

チェンバロオーケストラ

第十七回定期演奏会
開催日 七月三日
入場者数 七〇〇名

リスト生誕二〇〇年記念リスト音楽院・東京藝術大学コラボレーションコンサート
開催日 七月九日
入場者数 六三四名

管打楽器シリーズ ドイツで活躍する
名手ロヨナスとミックスを迎えて
開催日 七月十四日
入場者数 七一五名

第23号刊行にあたって

藝大通信リニューアル4号目の本号では、表紙の撮影を初めて屋外でおこない、塚原康子先生の爽やかな笑顔の気持ちのよい写真で飾ることができました。もちろん、中身も号を重ねるたびに充実さを増し、「読む気になる」顔つきになってきていると思います。

とりわけ連載二回目の「研究室探訪」は、私たちが知り得ない各々の研究室の日々の営みを垣間みることができ、私の好きな連載です。また吉田千鶴子先生による連載「上野の杜の波瀾万丈」では、誌面には到底収まり切らない激動の東京藝術大学史が刻まれており引き込まれてしまいます。

「東京藝術大学の資産は人である」の精神をぶらすことなく今後もより充実した内容を目指していきたいと思えます。

藝大通信編集長
松下 計

展覧会・演奏会の最新情報は、東京藝術大学公式 Web サイト (<http://www.geidai.ac.jp/>) をご覧ください。

●展覧会についてのお問い合わせ先

東京藝術大学大学美術館
Tel. 050-5525-2200
NTT ハローダイヤル
Tel. 03-5777-8600

●演奏会についてのお問い合わせ先

東京藝術大学演奏芸術センター
Tel. 050-5525-2300

●演奏会チケットの取り扱い

藝大アートプラザ
Tel. 050-5525-2102
ヴォートル・チケットセンター
Tel.03-5355-1280
チケットぴあ
Tel. 0570-02-9999
(一部携帯電話・PHS・IP 電話はご利用いただくことができません。)
東京文化会館チケットサービス
Tel. 03-5685-0650

●藝大アートプラザのご案内

Tel. 050-5525-2102

東京藝術大学広報誌 藝大通信 No. 23 SEPTEMBER 2011

編集発行 東京藝術大学藝大通信編集部